Medical and Pharmaceutical Society for WAKAN-YAKU

# D－2

## 更年期障害に対する桂枝茯苓丸の使用経験

○喜多敏明[1)]，柴原直利[1)]，日高隆雄[2)]，内　尚子[2)]，齋藤　滋[2)]，寺澤捷年[3)]
富山医科薬科大学・和漢薬研究所　漢方診断学部門[1)]，同・医学部　産科婦人科学教室[2)]，
同・医学部　和漢診療学教室[3)]

【目的】更年期障害に対して頻用される桂枝茯苓丸の臨床効果と，どのような症例に対して桂枝茯苓丸が有効であるのかを検討したので報告する。

【対象と方法】当院産婦人科漢方外来を受診した更年期障害患者の中で，漢方医学的診断を考慮して初診時よりツムラ桂枝茯苓丸エキス（7.5g，分3，食前）を4週間以上投与された14例（平均年齢：53.4±3.5歳）を対象とした。桂枝茯苓丸投与前と投与4週間後に簡略更年期指数（Simplified Menopausal Index：SMI）を用いて更年期障害の程度を評価し，その結果を治療前後で比較した（paired-t検定）。また，治療前後でSMIの総和が30％以上減少した9例を有効群，それ以外の5例を無効群とし，治療前におけるSMIの各症状の程度を両群間で比較した（Mann-WhitneyのU検定）。

【結果】全症例での検討では，SMIの総和は治療前54.8±18.1から治療後35.4±14.2へ有意に減少した（$p<0.01$）。SMIの中で血管運動神経症状（顔のほてり，発汗，冷え）に関する3項目の総和を検討したところ，治療前15.7±7.2から治療後9.7±5.4へ有意に減少した（$p<0.01$）。また，精神神経症状（不眠，怒り，憂うつ，頭痛）に関する4項目の総和は，治療前16.9±8.7から治療後11.2±5.9へ有意に減少した（$p<0.01$）。

有効群と無効群に分けて比較した検討では，治療前に有効群の方が症状の程度が有意に強かったのは「顔のほてり」と「不眠」であった（$p<0.05$）。逆に，無効群の方が症状の程度が有意に強かったのは「息切れ・動悸」と「肩こり・腰痛」であった（$p<0.05$）。

【考察・結論】桂枝茯苓丸は更年期障害患者が訴える血管運動神経症状と精神神経症状の両方にバランスよく効果を発揮することから，更年期障害に対して非常に使いやすい方剤であると考えられた。また，顔のほてりや不眠をあまり強く訴えずに，更年期症状としては非特異的な息切れ・動悸・肩こり・腰痛を強く訴えるような症例に対しては桂枝茯苓丸が無効となる可能性が高く，他の方剤も考慮する必要があると考えられた。



NII-Electronic Library Service